
不幸たる才

臥龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不幸たる才

【Nコード】

N4150F

【作者名】

臥龍

【あらすじ】

西暦184年の中国。当時の中国は黄巾賊の手によって荒れていた。そんな中、賊の魔の手を受けていない一つの小城にいた、一人の天才。彼の最初で最後の戦いの物語。

プロローグ（前書き）

注意。出てくる登場人物は、ほとんど創作上の人物です。あまり感情移入すると泣いてしまうおそれがあるのでご注意を（笑）

プロローグ

現在、残っている歴史の中で名を残している豪傑や天才。

誰もが知っている織田信長や、聖徳太子がそれに当たる。

彼らはある意味、幸運である。

自分の持っている才能や力を発揮できる場を与えられたからである。

しかし、長い歴史の中、彼ら以上の才能や力があるのに、発揮できる場を与えられずこの世を去る者も皆無ではない。

いや、逆にそちらの方が圧倒的に多いのだろう。

この小説はそのような者を作り、話を進めていく。

もしかしたら実際にあったのかもしれない。

これは当時、生きていた者にしかわからない。

舞台は古代中国の三国時代より少し前、後漢末期の黄巾賊による反乱が各地で起きていた頃。

後の三国志に登場する人物のほとんどはこの黄巾賊の討伐で名をあげたのだ。

閑話休題。

では、世に出なかった天才の最初で最後の大勝利をお楽しみください。

西暦184年の中国。

そのころの中国は、後漢の末期。

幼帝が即位し、その直属の臣下は帝の幼さに付け入って暴虐無人な悪政を布いた。

賄賂は当たり前で、出さない者は濡れ衣を着せて牢屋に放り込み、斬罪にするのだ。

このころ、ある宗教が民間で広がった。

太平道、俗に黄巾賊と呼ばれる宗教である。

頭に黄色い布を巻いているのでそう呼ばれた。

彼らは中国各地に広がり、反乱を起こすようになる。

これを黄巾の乱と言う。

その黄巾の乱の中にあつた名もない城の物語。

荊州の端の方にある山中に廃れかけた城があつた。

城と言っても城壁は崩れかけ、戦闘するには不向きな城であつた。

しかし、こんな城にも領主と軍がいた。

領主の名は李統。人徳があり、領民から人望があつた。

彼の軍は2000にも満たない数であつたが、一人一人よく鍛錬されてゐる少数精鋭であつた。

この軍の武将は二人居た。

名前は周介と周達といい、二人は兄弟であつた。

この二人は力があり、町中で人助けをしているので、城民から好かれていた。

そんな城のなかの村にある一件の家に一人の青年が居た。

名前は雷飛といい、読書が好きな18歳である。

彼は五歳の頃から本を読み始め、十二歳の頃には城にあるすべての本を読み切つたのだ。

そのおかげで李統の相談役として重宝されたのだ。

冷静沈着かつ物事を他人の視線から見ることが出来るので李統も彼に大いに助けられていた。雷飛も自分の親が子供の時に死んでおり、李統からの援助に助けられていた。

雷飛は自分の家で本を読んでいた。

普段は畑仕事をしているのだが、今日は雨で何もすることがないので本を読んでいた。

そのとき、家の戸を叩く音がした。

音のテンポからして急用でない事を悟ると、雷飛は戸を開けた。

そこには自分の幼なじみである楊麗が居た。

楊麗は城で一二を争う美人で、交際を求められた回数は数知れず。

それに美人と言うよりもかわいいという形容詞がよく似合う女性であつた。

彼女は雷飛の事が好きらしく、よく家を抜け出して雷飛に会いに来ている。

「やあ、どうしたんだ？こんな雨の日に。とりあえず入って」

雷飛は楊麗を家の中に入れ、戸を閉めた。

「で、どうしたんだい？」

雷飛は楊麗を座らせた。

「うん。実はね、今朝変な夢を見たの」

「変な夢？」

「そうなの。雷飛が戦に行つて死んじゃう夢…」

「フツハハハ！俺が死ぬ夢か」

「笑い事じゃないよ！」

「ハハッ悪い。でも夢の中で俺が一回死んだんだろ？」

「うん」

「なら俺は一回分死ぬ思いをしなくなっただって事だ。吉夢だよ」

「そう…なの？」

「ああそうさ。何でも悪い方向に考えたら本当に悪いことが起こるってこと。だからいい方いい方に考えるんだ。絶対に良いことが起きるから」

雷飛は笑って見せた。

「うん、わかった。ありがと、励ましてくれて」

「こっちこそ心配してくれてありがとう」

楊麗は笑顔で帰って行った。

外はすでに晴れているが、日が傾きかけている。

「畑を見ておくか」

雷飛は外に出た。

ずっと降っていた雨によってぬかるんでいたが、作物自体は大丈夫だったので家に帰ろうとした。

そのとき、雷飛を呼ぶ声がした。

そちらを見ると、馬に乗った男がこちらに向かってくる。

「雷飛殿！」

李統直属の武将、周達であった。

「周達殿、どうなされた。そんなにあわてて」

雷飛は口調を変えた。

さすがに公然ではいつもの口調はいけない。

「李統様が緊急の軍議をお開きになる。雷飛殿も至急出席するようにと旨だ」

「承知しました。すぐ支度をして向かいます」

雷飛は急いで家に戻り、服を着替えた。

そして、自分の馬に飛び乗って城に向かった。

いつも会議を行っている部屋に行くと、皆、雷飛を待っているようだった。

「遅れて申し訳ありません」

雷飛は自分がいつも座っている席に着いた。

「雷飛がついたところで軍議を始める。皆も聞いておると思うが、近々黄巾賊がここにくるかもしれないとの情報を隣の孫獲殿から頂いた」

部屋がざわめいた。

「だが、安心してくれ。孫獲殿が援軍2000騎を送ってくださいました。將軍は猛将といわれた劉帶殿だ」

席から一人立ち上がり、一礼した。

歳は40歳位でいかにも歴戦の勇士という威厳がある。

「副将は典勝殿だ」

こちらは猛将というより、知勇兼ね備えた武将という感じだ。

「劉帶殿、典勝殿。我々の事も紹介しよう」

李統は自分の家臣を紹介しだした。

周介、周達から、文官が紹介され雷飛の番となった。

「こちらは我が軍の軍師、雷飛殿だ」

雷飛は席から立ち上がり、一礼した。

劉帯と典勝は驚いていた。

「李統殿、あのお若いのが軍師殿でありますか？」

「ええ、歳18であります、5歳の頃より書を読み、12歳で城中の書をすべて読破した豪傑でございます」

「ほう。では試してみますかな」

と、典勝は言った。

「雷飛殿、我々はそなたのようなお若い軍師殿は初めてだ。そなたを疑っておる訳ではないが、一つ、試させてもらいますぞ」

「ええ、かまいません」

正直、雷飛には自信があった。

何度もこんなことがあったからである。

自分の知識を出せる場の一つであるので、緊張どころか早く問題を出してくれと思っているほどだった。

「では、行きますぞ」

典勝は兵法の基礎から応用、政治の事やその他無理難題を出したが、雷飛の知識と頭脳の回転の速さを見せつけられただけだった。

すべてが終わると典勝は雷飛の前にひざまづいた。

「貴殿のような才人、それがしは見たときがありません。先ほどの無礼をお許してください」

雷飛はあわてて典勝の元へと駆け寄った。

「頭を上げてください。私とてまだまだ未熟、そんな大それた者ではありません」

雷飛は尊敬されるのは嫌いではないのだが、誇りたくは無い。

そんな性格が彼をこうさせたのだ。

劉帯も自分の才を誇らない雷飛を密かに感服した。

「では、軍議を進める。まず、黄巾賊の勢力を教えてください」

「はっ」

典勝が立ち上がった。

「賊の勢力は1万。將軍は張宝です」

再び部屋がざわめく。

「雷飛。どう見る？わしには圧倒的に不利としか見れんが」

李統は雷飛に質問した。

雷飛はゆっくりと答え始めた。

「いや、これは逆に好機というものでしょう。大きなイノシシが自ら縄にかかりにくるのです。これを見逃すわけにも行かないでしょう」

「さすが雷飛殿、何か考えがありがたいようだ」

典勝が言った。

「ええ、数を見れば4000対1万、圧倒的に不利です。しかし、この城は守るに易く、攻めるに難い城です。簡単には落ちません。ですので、賊は長期戦を覚悟するか、他の所に移るかのどちらかです。今の賊の情勢や戦い方を見れば後者は考えづらいです。よって長期戦を望むはず。長期戦となれば、まず困るのは兵糧です。よって賊は近くに兵糧の保管庫を確保するはずです。恐らく、ここから15里ほど先にある城をおそうかと。方角的にも少し進路を変えるだけです」

雷飛はふうと呼吸を入れた。

「…いや、すばらしい。さすが雷飛だな」

「では、雷飛殿はその城が占領されたときに攻め込めばよいということであるか？」

典勝は雷飛の考えを読んで言った。

「いえ、それでは賊の方が有利になってしまいます。賊がこの城の

前に布陣したときにその城を攻めればよろしいでしょう」

「ならば、この城は如何にして守るか？」

「城門を閉じ、何事があっても打って出ないことに限ります。城攻めの部隊が戻ってくる際に挟撃しても遅くはありません」

部屋全体がシーンと静まりかえった。

皆、雷飛の知識に感服したのだ。

「では、雷飛。汝にこの戦の指揮を任せる。わしが密かに編成した騎馬隊2000を汝に与える」

「ありがたき幸せです」

この会議の翌日、雷飛は軍の編成に当たり、それぞれ籠城する部隊と城攻めをする部隊、そしてもう一つの部隊を編成した。

その部隊は、將軍を周介、副將を周達とし、李統が雷飛に与えられた2000人を率いる。

この部隊の用途は、周介と周達にしか知らされていなかった。

編成を終わらせた雷飛は、兵の動きを各武將に知らせ、自分の家に戻った。

そして、いつもの格好に戻り、普段やっている畑仕事を始めた。

ある日、李統の言葉を伝えるため、周達が雷飛の家に来た。

「雷飛殿、戦も近いと言うに何ゆえ畑仕事を？それがしには理解できぬが」

「敵に総大将を知らせないためです。それに、いま栽培している力ブは成長が早いので兵糧にするにはうつつつけの野菜なのです」

「流石です。その知識も書に記してあった事柄であるか？」

「いえ、これは隣の農民から教えてもらったことです」

周達は感心した。

役に立つ知識は何からも取り入れるという姿勢は見習うべき事だと周達は思った。

「そう言えば李統様からの伝言を授かっております。雷飛が言ったとおり、賊にあの城を制圧された。とのことですよ」

「わかりました。周達さん、出発の準備はできておりますか？」

「何時なんじきでも出発できます」

「では、出発願います」

「御意」

周達は城に向かって走っていった。

雷飛は伸びを一回すると、畑仕事に戻った。

「おや？」

ふと、道の方をみると、楊麗が散歩をしていた。

「おい楊麗ー！」

楊麗はこちらを向いた。

そして嬉しそうな顔をして手を振ってきた。

雷飛は楊麗のところへ走っていた。

「やあ楊麗、いつもの散歩か？」

「うん。雷飛もいつもの畑仕事？」

「まあな」

「聞いたよお、軍の指揮をする事になったんだってね。こんなところで畑いじっていいの？」

「ああ、むしろこの方がいいんだ」

「ふうん。雷飛の事だからきつと考えがあるんだよね。私にはわかんないけど」

「たしかに、難しいことをグダグダ言われるより結果を見た方が早いな」

「確かにね。そう言えば、今夜ね、私のうちで宴会をやるの。お父様も友達を呼んでも構わないっていったから。雷飛、くる？」

「宴会か。戦いの景気付けにやるのも悪くないな」

「なら決まりだね。私の新しい舞もやるから絶対来てね」

そついうと楊麗はとてとていつてしまった。

「舞か。下手をしたらもう見れなくなってしまうかもしれないな」

自分の冗談に笑い、雷飛は畑に水をまいていた。

その夜、李統の前にでる時と同じ服装で楊麗の家に向かった。

「おお、雷飛殿ではありませんか」

出迎えたのは楊麗の父、楊筍であった。

付近一帯の地主で、七日に一日、宴会を催すほどの宴会好きであった。

「貴殿のような方がこんなところにくるとは、小さな屋敷ですがどうぞお入りください」

「いえいえ、私ほどの者、探せば五万といるでしょう。それにこの屋敷は私の住んでいる小屋と比べることができません」

いつもこんな感じなのだ。

すでに、一種の合い言葉になってしまっている。

中に案内されると、コの字型に席が並べられ、その一つ一つに豪華な食事が乗っている。

雷飛は主人が座る席の右側に案内された。

「私がここですか？」

雷飛は案内した召使いに質問した。

「ええ、間違いありません」

雷飛は読めた。

楊筍殿も謀るな、と思いながら内心、嬉しかった。

つまり、楊筍は雷飛と娘の楊麗の関係に反対しておらず、むしろ歓迎しているのだ。

そして、おもむろに席に着いた。

直に宴会は始まった。

席には楊筍の友や、同郷の者が着いていた。

毎回、同じメンバーなので、すっかり顔も覚えている。

雰囲気もなかなかよくなったところで楊筍が立ち上がった。

「皆様方、程良く酔ってきた頃合いでしょう。此度の宴会では、酒ばかりではなく我が娘の楊麗による舞にも酔っていただきたい」

会場が盛り上がった。

楊筍が手で合図すると、待機していた楽器を持った楽人が演奏を始めた。

軽快な音楽に合わせて踊り子たちが輪を作って踊り始めた。

そしてその中央に舞踏服に身を包んだ楊麗が踊っていた。

まるで、楊麗が花の中で舞っているようだった。

出席している者は楊麗の踊りに魅了されていた。

雷飛も例外ではなかった。

雷飛には、楊麗は普段かわいい印象があるのだが、この時は美しい

印象が強かった。

やがて、踊りが終わると、観客の拍手を浴びながら、楊麗が雷飛の横に座った。

「雷飛殿、どうぞ」

楊麗は丁寧な口調で酒を注いだ。

「あ、ああどうも…」

いつも気軽にはなしているのに、この時だけは緊張した。

天才と呼ばれた彼でも、元は18歳の青年。

恋には心が揺らぐのだ。

「半刻後に中庭にて」

現代風に言つと、一時間後に中庭で待っています。ということだ。

そついうと楊麗は室の中に入ってしまった。

注がれた酒を飲んだ。

そのとき、肩をたたかれた。

見ると、楊筍がニヤニヤしながらこちらを見ていた。

「そなた等のために一室用意した。今晚は泊まっていくながらいい」

「は…はい」

一時間ほど立つと、酔いつぶれてくる者も出始めた。

歌い始めたり、寝始めたり、とにかく酔いすぎである。

雷飛はそんな中を抜け出して中庭へと向かった。

雷飛は中庭へと向かった。

月光に照らされた楊麗がそこにいた。

白い肌が月光によって青白く光り、輝く瞳が神秘的だ。

「雷飛…」

「楊麗…」

雷飛が楊麗の元に駆け寄った。

始めはあまり多くは語らなかった。

言葉を交わさずとも、互いの意志が通じる気がした。

二人はこんな気持ちは始めてで、不思議だった。

暫く見つめ合っていたが、二人は寄り添って月を眺めることにした。

「楊麗、見違えたよ」

始めに言葉を発したのは雷飛だった。

「ありがとう」

楊麗が照れくさそうに言った。

実際、露出度の高い舞踏服を着ているため、雷飛の前だと余計に恥ずかしい。

「…雷飛も子供の時から見違えたよね」

雷飛が楊麗の方を向いた。

「なぜ？」

「だって、雷飛のご両親が死んで、一人で一生懸命畑仕事をしていた頃は軍の指揮をするなんて思ってたもん」

「はは、そうか」

雷飛もそんなことは当時思っていなかった。

「…ねえ。この戦、負けたらどうなっちゃうかな？」

「負けたら…か」

雷飛が楊麗の顔をのぞくと、不安と寂しさが出ている。

無理はない。

これから戦が起こるのだ。

もし負けて賊が城に入ってきたとき、自分はどうなるのか。

もし負けて雷飛が死んでしまったら、誰を頼ればいいのか。

雷飛は楊麗にそんな不安が付きまっていることを察した。

「…負けないさ。相手は大軍といえど賊は賊。つまり烏合の衆さ。それに…」

雷飛は楊麗の頭をなでた。

「悪い方に考えれば本当に悪いことが起きる。逆に良い方に考えれば良いことが起きる。最近教えたろ？」

「うん…。絶対に勝つ…よね？」

「絶対に勝つ。約束する。だから安心してくれ」

「約束だよ」

「ああ、約束だ」

この後、二人は同じ室内で一夜、雷飛にとって最初で最後になるかもしれない夜を過ごした。

翌朝、雷飛は日がまだ上がりきっていない頃に起きた。

まだ寝ている楊麗を起こさないように支度をし、屋敷を出ていった。

自分の家に着くと、直ぐ馬を出して城へ急いだ。

城に着いた時には既に日は出ていた。

「李統様、お食事中失礼します」

李統は朝食をとっていたが、雷飛が来ると箸を置いた。

「おお雷飛か。伝令が来ておるぞ」

「承知しております。一つ確認したいことがあります」

「なんだ？」

「周介殿と周達殿は出発したでしょうか？」

「ああ、した。昨日の夜中に」

「ありがとうございます」

そういつと雷飛は下がった。

雷飛はいつも会議をしている部屋に皆を呼び、伝令を呼んで戦況を

聞いた。

周介と周達は持ち場に着き、典勝も賊の城の西十里に兵を伏せた。

賊はこの城の東五里に陣を布いたという。

「わかりました。今から私が指揮をします。劉帶殿はいらっしゃいますか？」

「ここにいます」

「劉帶殿は兵500を率い、夜襲をして下さい」

「はっ」

「目的は勝つことなく兵力を削ることですので、決して出過ぎず、程良い頃合いに引き上げて下さい」

「承知しました」

劉帶は準備に取りかかるために下がった。

「劉帶殿以外は城から打って出てはなりません。決して動かず、泰山のようにして下さい」

その後、一通り細かい指示を出した雷飛は城内にある自分に用意されている部屋で休んだ。

普段、小屋のようなところで住んでいる雷飛には少し落ち着かなかった。

昼寝をしようと思ったが寝付けず、城内を散歩することにした。

城といっても、豪華なものでもなく、無駄に大きいだけ。

村を囲うように立っている城壁は高めに作ってあるが、修理をしていないのでボロい。

だが、小高い丘の上に立っているので、守るのは簡単で攻めるのは難しい。

高いところに城があるときに困るのは水だが、ここはわき水がいくつもあるので困ることはない。

賊は時々くるのだが、このような大軍では始めてである。

兵法では城責めをする際、城兵の三倍の兵力を要するという。

賊の兵力は1万。城兵は6000。

勝つことは難しいにしても、負けることはない。

それに今回の作戦が巧く行けば、賊將張宝の首を取ることもできる。

しかし、戦とは不確定要素が多数あるもの。

だから油断は禁物。敵を侮ってはいけないのだ。

雷飛はふと、城の外から見える景色をみた。

緑が生い茂り、川が流れゆく。

いまにも小鳥のさえずりが聞こえてきそうである。

どこに戦乱があるのか、どこに争いがあるのか。

ここからの景色はそれらを物語っているように思えた。

景色に見とれていると、いつの間にか日は昇りきっており、昼食の時間となっていた。

雷飛は朝から何も食べていないことを思い出した。

そんな折、兵たちの演習を見てきた李統が通りかかった。

「どうした、雷飛。 なにか憂いでもあるのか？」

「いえ、思えば朝から何も口に入れていないので、つついボーっ
としておりました」

「そうか。ではわしと昼食を共にせんか？」

「はい」

雷飛は李統と食事をしながら、今後の政治についての相談を受けた。

戦は多大な出費をするため、今後の財政は李統を悩ましていた。普通は相手が賊なので討伐すれば中央から恩賞をもらえるが、今の中央は賄賂を渡さないと恩賞をくれない。

それに、賊の影響で商人の往来ができてない。

となると、城民からの最低限の税も確保できなくなる。

「なるほど。ならば李陽とも相談しておこう」

「ええ、その方がいいでしょう。私も気付かないところがきつとあるはずです」

李統との食事を終わらせた雷飛は、自室に戻った。

さっきは寝付けなかったが、今は不思議と眠たい。

雷飛はそのまま意識を失ってしまった。

気が付いたときには日が沈みかけ、空と大地を赤く染めていた。

「結構寝ていたんだな…」

乱れた服装を直し、城の入り口へと向かった。

そこには、夜襲の準備を終わらせた劉帯と兵士500人がいた。

「やあ、軍師殿。いつでも出発できるようにしておきました」

「ご苦労様です。まだ日は落ちていないので兵達に十分な休息をと

らせて下さい」

「承知しました」

「あと、攻め込むときは兵一人に五束ほどの松明を持たせて下さい」

「火計を用いるのであるか？」

「いえ、狙いは敵の混乱。同士討ちをさせて兵を削るのが主です」

「流石です。そなたを敵に回したく無いですな」

「ハハハ、歴戦の勇士である將軍にそう言われるなど身に余る光栄です」

「ご謙遜を」

その後も暫く劉帯と話をしていたが、用を思い出して別れた。

用というのは楊麗のことである。

朝に寝顔を眺めてから一度もあっていない。

それに、もうすぐ戦が始まることを知らせないといけない。

馬を走らせ、楊麗の家に向かった。

召使いが門の前を掃いている。

そこへいきなり馬が走ってきたので驚いて門の裏に隠れてしまった。

「君、楊麗は居るか？」

「は、はい。楊麗様ならお部屋にいらっしゃいます」

「そうか。ありがとう」

楊笥は留守のようで、家には召使いしかない。

昨日、楊麗と過ごした部屋に行く途中の中庭に彼女がいた。

池のほとりで花を眺めながら歌っていた。

「楊麗」

「あつ雷飛」

楊麗は笑顔で駆け寄ってきた。

化粧を落とし、服も普段のままなのでかわいい印象が強い。

「朝起きたらいないから心配したよ」

「悪い。朝早く出ないと軍議に遅れるから」

「なら仕方ないよね。軍の指揮官として遅れちゃいけないもんね」

「悪いな。無理させて」

「うつん、無理なんかしてないよ。雷飛の為なら何でもするから」

「ありがとう」

雷飛にはこの言葉が何よりもありがたかった。

子供の時から気軽に頼れる存在というのが無かった。

だから、嬉しかった。

「楊麗、今夜から戦が始まる。俺はその指揮をしなくちゃいけない。だから暫く会えなくなるけど待っていてくれないか？」

楊麗は迷わず頷いた。

「うん。待ってる」

「ありがとう。必ず勝って帰ってくる。そう言う約束だからな」

雷飛は楊麗の家を後にし、城壁の門へと向かった。

日は既に落ち、哨兵の松明しか見えなかった。

雷飛が門の前で馬を下りると、哨兵は礼をした。

「礼はしなくても結構です。賊の様子はとうですか？」

哨兵は礼を解いた。

「はい。薪をして、夕食をとっております」

「わかりました。これは私からの選別です」

雷飛は馬に結んでいた箱の中から肉まんを取り出して哨兵に与えた。

先ほど、楊麗の家でもらった物である。

一人では食べきれないほどもらったのだ。

「あ、ありがとうございます…！」

「いえ、兵とて人間。戦に勝つためには必要な存在です。なので私からのささやかな労いねぎいということですよ」

雷飛は哨兵の小屋に行き、休んでいる兵達にも肉まんを与えた。

そして自分は城壁に登り、残った肉まんを頬張っていた。

「後一刻くらい…だな」

いくら遠く離れていても明かりや薪の煙はよく見えた。

影の量から言つて、先鋒の3000人は確認できた。

よく見てみると、兵達は酒を飲んで酔っぱらっていた。

雷飛は伏兵の心配をしていたが、この様子なら無いと言つて良い。

一時間ほどすると、だいぶ酔つたらしく、寝始める兵が出ていた。

その一時間後、明かりは哨兵の松明しか見えなかった。

「そろそろだ」

下にいる兵に劉帶を呼んでくるように頼んだ。

だが、その兵は直ぐ帰ってきた。

「すでに劉帶様はすぐそこまで来ております」

雷飛は急いで城壁から降りた。

たしかに、いくつもの松明がこちらに向かっている。

「やあ雷飛殿。時は今で良かったかな？」

先頭を馬に乗って歩いてきたのは劉帶であった。

「ええ、さすがは將軍。時節をよくわかっていらっしやる」

「いやいや、長年の勘というものです」

「そこばかりは、私でも將軍より年を重ねないと得られないものでしょう」

また話が長くなりそうなので程良いところで雑談を終えた。

雷飛は再び城壁に上り、敵陣の様子を見た。

「雷飛殿。伏兵の気配はあるか？」

「いえ、先程から見ていましたが、賊は酒に酔って熟睡しているようです」

「ならば」

劉帯は城壁の外に出て兵達の列を広げた。

そして、横並びに付け、兵達に背負わせている松明に火を付けた。

周りは暗いので実際の数より多く見える。

「よし、ゆくぞー！」

兵はオーと声を上げて前進していった。

全員騎兵なので速度は速い。

騎兵隊は銅鑼を鳴らし、敵陣に突っ込む。

賊の哨兵はあわてて警報の銅鑼を鳴らしたが、既に時は遅かった。

劉帯の軍は柵を乗り越え、見回りをしていた兵を斬った。

丸腰の賊は混乱に陥り、逃げ出したり武器の取り合いを始めた。

その間も劉帯は賊を斬って殲滅を加えていった。

賊は武器を取ると敵も味方もわからず、ひたすらに抗戦した。

しかし、結果的にそれが同士討ちに繋がっていた。

やがて、陣に火の手が上がった。

劉帯率いる騎馬隊はそれを合図に背負っている松明を捨て、城内に退いた。

捨てられた松明は陣が焼けるのを助けていた。

劉帯達が退いた後も賊の同士討ちは終わらなかった。

結局、賊の先鋒は3000人だったが、この夜襲で1000人ほどに減ってしまった。

それに比べて劉帯の騎馬隊はけが人が出たというものの、一騎も欠けなかった。

雷飛の戦略も見事だが、劉帯の用兵もそれ以上に素晴らしかった。

この二つが相重なって賊の先鋒は散々に打ちのめされたのだ。

翌朝、雷飛は劉帯に話しかけた。

「將軍、昨夜は見事でした」

劉帯は先程、李統から金を貰う予定だったが、まだ戦は始まったばかりだからと辞退したばかりであった。

「軍師殿か。それがしはそなたの命に従ったまでです」

「いや、いくら良い策を出しても実行するのが愚将ならば愚策となります」

「ははは、そうであるか」

そのとき、伝令の兵が城に入ってくるのが見えた。

「將軍。私はそろそろ」

雷飛は劉帯に別れを告げ、李統の部屋に向かった。

「敵本陣が到着、陣を布きました」

「そうか。下がって良いぞ」

「はっ」

伝令兵は下がった。

「聞いたか雷飛」

「ええ、既に二千ほど減らしておりますので籠城も楽になるでしょう」

「そうか。人民を守るためならいつまでも時節を待つ」

それから十日がたった。

賊は城壁の前まで来て罵っていたが、雷飛は動くことを許さなかった。

ただ、

「時節を待ち、人民を守るのです」

の一点張りであった。

賊將の張宝は妖術をよく使うと言われているが、城壁相手では施す妖術はないらしい。

それに、妖術は雷飛にとって自分の知識を披露する材料にしかならなかったのだ。

さらに二日たった。

いつもの城壁からでなく他の城から伝令兵が来た。

「賊が制圧した城を奪還。戦利品は大量にあります」

雷飛は内心すごく喜んだ。

公然なので表には出さなかったのだ。

「ことは順調に進んでいるようですね。典勝殿に兵を休ませて賊の後ろを攻撃、と伝えて下さい」

「はっ」

伝令兵は下がり、すぐに出発した。

その後、雷飛は自室に居た。

「夕食です」

召使いの男が夕食を運んできた。

「ご苦労様です。やっとあなたの出番がやってきましたよ」

「そうですか。このきつい服ともおさらばできますな」

男は軽く背伸びをした。

「時が来たと周介どのに伝えて下さい」

「わかりました。兄者も首を伸ばして待っているかと思います」

召使いの格好をしていたのは周達であった。

背丈は他の人と変わらないが、武士であるので腕のあたりが少々きつかったらしい。

「では、手筈通りをお願いしますよ」

「御意」

周達は大股で部屋を出ていった。

「敵を騙すならまず味方から、か……。李統様には悪いことしたな」

雷飛は夕食に箸をのばした。

翌日、城壁の上から賊を見てみると切り詰めた朝食を不満そうに食べていた。

数日前の夜襲をする前は、酒や肉を楽しそうに口に運んでいた。

だが、今は見る影なしである。

「劉帶殿、時は来ました。出撃の準備をお願いします」

「おお、やっときましたか。すぐにいたしましょうぞ」

劉帶は久しぶりに戦場にでれる上に、賊に罵られていた鬱憤を晴らせるので急いで支度をした。

兵達も待つてましたとばかりに支度を始め、三時間ぐらいで1500人の軍隊を作った。

雷飛は予想外の編成の早さに驚いた。

「雷飛殿、出撃の許可を！」

「よし。門を開ける！」

雷飛が号令を発すると門は開き、劉帶軍は一気に出た。

銅鑼が鳴り、士気があがる。

賊も戦闘体型となつて劉帶軍に正面からぶつかった。

兵力は圧倒的に不利だが、劉帶軍と賊軍の士気の差がそれを埋めていた。

賊はただただ討たれるだけで無駄に屍の山を築くだけであつた。

雷飛は城壁から降り、100騎ほどで城門を守っていた。

「おい、城に入れるぞ！」

こんな声が賊の中からしたと思うと、劉帶軍を無視して城門へ駆け出す兵が大軍を作つた。

だが、その大軍の進路を阻むかのように横の森から一隊の軍が現れた。

「我こそは周達、城には誰一人入れません！」

流れゆく川をせき止めるように周達軍は賊の討掃を始めた。

雷飛の隊は漏れてきた賊を討つていった。

雷飛も槍を振るつて城内に一人も入れなかった。

だが、雷飛は武術の方は兵より少しはマシという程度。

いつしか隙が出来、賊兵の一人が雷飛に上段から剣で斬りかかった。

だが、剣は空を切り賊の額には一本の矢が立っていた。

雷飛は矢が放たれた方向を見ると、楊麗が弓を構えて立っていた。

「なっ…」

雷飛は楊麗の元に駆け寄った。

「何で来たんだ！ここは戦場なんだぞ！流れ矢が当たったらどうするつもりなんだ！」

普段見せない怒りの声は楊麗を泣き眼にさせただけでなく、そばにいた兵をも驚愕させた。

「だ、だって…雷飛だけ戦って私だけなんにも出来なくて…すごく悲しくて…」

半ベソをかきながら楊麗が言った。

「はあ…。忘れたのか？必ず勝つって。だから家で待っていてくれって」

雷飛は楊麗の頭を撫でた。

「それに、泣き虫の世話もしなくちゃならない」

雷飛は手をおろした。

「城壁の上はいくらか安全だからそこにいてくれ」

楊麗はコクリと頷き、城壁に登る階段へ走っていった。

そのとき、一閃の矢が城門をくぐった。

その矢は振り向いた雷飛の右肩に当たった。

「ぐはっ！」

雷飛はよろめいた。

衣服に赤いシミが広がる。

遅れて激痛が走る。

「雷飛！」

楊麗が登りかけていた階段を下り、雷飛に駆け寄ろうとした。

「来るな！」

楊麗はビクツとして止まった。

「来たら俺の二の舞になる……」

雷飛は矢を抜き、槍を杖にして城門に近づいていった。

そのとき、再び矢が雷飛の太股に当たった。

「がっ……」

雷飛はバランスを崩し、その場に倒れてしまった。

「雷飛殿！」

異変に気づいた周達が雷飛に駆け寄った。

「周達殿：私がケガをしたと全軍に回ったら勝てる戦も勝てなくなってしまう。もし、回ってしまったら雷飛は軽傷で命に別状はないと言っして下さい」

雷飛は立ち上がろうとしたが、太股に矢が刺さっているため立つことが出来ない。

「承知した。兵達にそなたを城に運ばせよう」

雷飛は兵の肩を借りて馬に乗り、城に運ばれた。

それに楊麗もついて行った。

すぐに医者に治療して貰った。

治療と言っても傷口に薬を塗って包帯を巻き、漢方薬を飲むだけである。

「くっ…があっ」

傷口がさらに痛みだす。

熱も出てきた。

楊麗は雷飛の額に濡れた布をのせる。

「楊麗……」

「雷飛！？」

雷飛は何とか頭を動かして楊麗の方をみた。

最終話

「ごめんなさい、雷飛…私が出てきちゃって…」

「なにを言う。お前は悪くない」

「で、でも!」

「楊麗、お前が現れたとき、流れ矢が当たったらどうするんだと言った」

「えっ」

「それが本当になっただけだ。だから気にすることは…くっ」

雷飛は右肩を押さえた。

「雷飛!」

「すこししゃべりすぎたようだ。休ませてくれ」

「うん」

雷飛はゆっくりと瞳を閉じた。

「楊麗、といったかの」

声がした方を振り向くと李統が立っていた。

「李統様…」

李統は楊麗の横に座った。

「戦の勝敗を伝えにきたんだがの」

「えっもっ?」

李統はゆっくり頷いた。

「結果は我が軍の大勝利。賊の将が張宝で無かったこともあるが、雷飛の作戦が大きな勝因。一番の功労者は彼じゃよ」

李統の言葉はゆっくりで優しさが込められていた。

詳しい戦況は、まず劉帶軍が打って出て敵に当たり、ほぼ同時に賊軍の後ろから周介軍がせめて挟撃とした。

賊軍は浮き足たち、城門を守っていた周達軍は一気に巻き返した。

これにより賊軍は敗走、逃げ落ちた賊兵は後からきた典勝軍によって討たれた。

「以上が今回の戦の全貌。雷飛の大手柄じゃろ?」

「そんな作戦を指示出来るようになってたのですね」

「うむ」

「でも、雷飛ならきつとこう言います」

楊麗は雷飛の方を寂しそうな目を向けた。

「私は口を動かしただけです。ですので私の恩賞は財政に当ててください」って……えっ？」

楊麗はハツとした。

雷飛がいつの間にか起きて楊麗の言葉をまねていたのだ。

「起きてたの！？雷飛」

「ああ、さつきからな」

雷飛はゆっくり深呼吸をした。

「李統様」

「なんじゃ」

「今から言う事が遺言になることをお許してください」

「不吉なことを…」

李統は目を袖で隠した。

「自分の身は自分がよく分かっております。私はそう長くありません。すでに矢の毒は全身を回っております」

そして一呼吸入れた。

「先程も言ったとおり、私の分の恩賞はすべて財政に当ててください」

「うむ…。是非もない」

「…楊麗」

楊麗は手で顔を覆って泣いていた。

雷飛は楊麗が泣いているわけを察した。

そして楊麗の頭に手を置いた。

「あつ…」

そしてゆっくりと撫でた。

「俺はすぐ旅立たなきゃならなくなった。戻ることの出来ない冥土への旅だな」

「うん…」

「俺は冥土への土産を、楊麗という天下の美人と過ごした、すべての時間にする」

「うん…ありがとう…」

雷飛は楊麗の表情が良い方に変わったら手を静かに戻した。

そして楊麗の方に顔を向けた。

「俺に合いたいんなら、出来るだけ遅くに来てくれ。それに見合うだけの事をするのに準備が必要だからな」

雷飛は楊麗に笑顔を見せた。

「うん、わかった。先に行ったことを後悔させてあげる」

「フフ、楽しみだな」

そういうと雷飛はゆっくりと目を閉じた。

「……」

楊麗はしばらく沈黙していた。

泣きたい、悲しい、そういった感情を必死で押さえつけていたのだ。

「楊麗……」

李統が心配して声をかける。

「大丈夫です」

楊麗は立ち上がった。

「いつまでも雷飛を頼ってちゃいけませんし、それに……」

そして部屋の出口の前まで来て雷飛の方をみた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4150f/>

不幸たる才

2010年10月11日08時03分発行